



重度知的障害者地域生活支援の実践者と協働で行う アクションリサーチにおける研究者の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古井, 克憲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003113

重度知的障害者地域生活支援の実践者と協働で行う アクションリサーチにおける研究者の役割

古 井 克 憲
和歌山大学教育学部

要 旨

本研究の目的は、筆者が行った重度知的障害者の地域生活を支援するためのアクションリサーチのプロセスを、筆者と実践者との関わりに焦点を当てて分析することによって研究者の役割を提示した上で、支援現場の実践者との協働で行うアクションリサーチの方法論的考察を行うことである。質的データの分析の結果、筆者の役割は【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】及び【進行管理に側面的に関わること】の2点であった。筆者がこの2点の役割を果たすには、アクションリサーチのみの関わりではなく、筆者による同会での【支援者としての関わり】が重要であった。以上より、研究者が、アクションエンゲージメントを基盤とした「研究者という立場から関わる実践者」のスタンスをとること、モニタリング・評価へのセンスメーカーリングを行うこと、セミフォーマルな場を作ることが支援現場でのアクションリサーチにおいて重要であると述べた。

キーワード：アクションリサーチ， 重度知的障害者地域生活支援， 実践知，
アクションエンゲージメント， センスメーカーリング

I. 研究背景及び目的

本研究では、筆者が行った重度知的障害者の地域生活支援でのアクションリサーチを通して、アクションリサーチにおける研究者の役割について検討する。アクションリサーチは、「研究者が課題や問題を持つ人々とともに協働し、課題や問題を改革していこうとする実践であり、知識創造にも貢献する研究形態」（藤井2006）として位置づけられる。そのプロセスは多くの場合、実践者と研究者からなるグループや、研究者と当事者からなるグループといった研究主体による「観察」「考察」「実行」「評価」「修正」を一つのサイクルとして、それが繰り返されるものである（McNiffら2006）。このようなプロセスで用いられる方法には、「トライアングレーション」が求められている。この「トライアングレーション」には、「目標状態実現に向けた長期的な時間プロセスのなかで研究者／対象者構造を転換し、それに応じて複数の方法、ツール・プロダクトをそのなかに配置するという意味」が含まれる（矢守2007）。アクションリサーチで求められる方法は、量的方法でも質的方法でもよいとされる。その中で、エスノグラフィーやインタビュー、言説分析といった質的方法を先鋭化し、特定の方法に固執せず適切に組み合わせていくことがアクションリサーチにつながると論じられている（杉万2006）。

これまで筆者は、重度知的障害者の地域生活支援組織NPO法人「Aの会」でアクションリサーチを行ってきた（古井2008）。このアクションリサーチの前段階として、同会ではアクティブサポートモデル（以下、AS）学習会が、グループホーム/ケアホーム（GH/CH）支援職員を対象に開催された。AS（Jonesら＝2003）は、コミュ

ニティにおける支援付き住居で重度知的障害のある居住者が生活場面に「参加」することを促進するために、イギリスのウェールズで開発された職員向けのトレーニングモデルである。筆者が同会の代表に依頼され講師として参与したこの学習会は、職員がモデルを学ぶと同時に、同会のGH/CH居住者の生活実態について振り返る場として機能した（古井 2006）。2004年4月から同年10月までの計12回の学習会後、同会の代表によってASがGH/CHにおける支援に有効であると考えられた。そのため同会では、本格的にASを同会のこれまでの実践に応用して導入することを目指すワーキンググループが結成された。筆者もそのメンバーの一員となる。この段階で筆者は、同会によるASを基にGH/CH実践を改善する取り組みを、アクションリサーチとして自覚的に行うようになった。ワーキンググループによる2005年2月から2008年1月までの取り組みをアクションリサーチのプロセスから見たとき、次の5点を一つのサイクルとしていた。第1にワーキンググループは、同会のGH・CH職員が参加する事例検討会を「観察」した。その上で第2に、ワーキンググループ会議での「考察」によって、グループのメンバーとともに同会のGH/CHにおける支援に関して改善すべき点とそのための支援方法を明確にした。改善すべき点というのは、支援者がGH/CHでの生活に必要な活動を居住者に代わって無意識にしているのを支援と考えていることによって、居住者も支援者も気づかない内に、居住者の豊かな生活や人間関係を阻害している事態にあった。この事態を居住者の生活場面への「参加」を促進するASを基に改善し、その結果を冊子化・セミナーを開催して他の支援現場に普及させることがワーキンググループの取り組みの目標となった。そして第3に、この目標達成のためにワーキンググループは、GH/CH支援職員に支援方法を教示して職員がそれを実施し、事例検討会でモニタリング・評価を行うという形式で居住者への支援を「実行」した。第4に、その結果に対する「評価」を事例検討会で行い、さいごに、ワーキンググループ会議で支援方法の「修正」を行った。

現在まで筆者は、このようなアクションリサーチのプロセスの中で形式化した支援方法（古井 2007）の成果と実施過程を明らかにするため、Aの会のGH/CH支援職員が記述したアセスメント、筆者が記述したワーキンググループ会議の議事録・事例検討会の参与観察記録の質的分析を行った。これは、調査協力者による自由記述の分析と、参与観察の実施・分析との「トライアングレーション」が行われたことになる。その結果、支援職員が重度知的障害者の生活場面への「参加」を促進するための支援を実施することによって、彼／彼女らの不安感が軽減された、周囲に認められる、成功経験が増えるといった成果が見られた（古井 2009b）。さらに、GH/CHで重度知的障害者が求める支援（古井 2009a）における障害者と支援者との関係性（古井 2009b）について以下の仮説を生成した。それは、「ステップ方式をとらない」視点をもって行われる選択肢形成サイクル¹⁾における支援を障害者が求めているということ、そのような支援は障害者と支援者との共同性によって成立するという点であった。この仮説を生成した意義は、アクションリサーチにおける知識創造への貢献にもつながる点にある。さらに、先行研究では障害者と支援者との相互関係における支援が重要であると指摘されるにとどまる中で、支援者側から見た障害者と支援者の姿と関係性を具体的に記述、分析して明らかにした点にある。

ただ、これまで筆者のアクションリサーチに関連する研究では、上記のように支援職員による重度知的障害者への支援の改善過程とその成果を提示したにとどまり、そのプロセスに筆者がどのように関わってきたかについては十分に示していない。アクションリサーチが研究者とワーキンググループの実践者との協働で行われるものである限り、そのプロセスにおける筆者の関わりについても分析し、検討する必要がある。なぜなら、社会福祉領域においてアクションリサーチの重要性は述べられているが、支援現場での具体的事例を基にアクションリサーチにおける研究者の関わりの内容について論じられているものは少ないからである。筆者は、大学院生としてAの会に実習生としてエントリーし、その後、調査を継続する等のため同会でヘルパーとして参

と観察を約7年間行った。先述の学習会には筆者が講師として依頼され、その後ワーキンググループの一員として招かれた。このことからして、同会の実践者は、大学院生でありヘルパーでもある筆者に対して、実践の内実の一部を知る者であるものの、研究する立場の者として同会の取り組みに関わることを期待していたといえる。約2年間という比較的長期間に渡り、研究成果も見いだすことができた筆者のアクションリサーチを通して、筆者の側から見た実践者との関わりの内容を明らかにすることは、社会福祉領域において支援現場との協働を目指す研究者の役割及びアクションリサーチの方法論的考察につながる点で意義があると考えられる。

したがって本研究の目的は、筆者が行った重度知的障害者の地域生活を支援するためのアクションリサーチのプロセスを、筆者の側から見た実践者との関わりに焦点を当てて分析することによって研究者の役割を提示した上で、支援現場の実践者との協働で行うアクションリサーチの方法論的考察を行うことである。

II. 研究方法

NPO法人「Aの会」は、1979年に発足し、それまで重度知的障害者を対象にしていなかったGH/CHやガイドヘルパー派遣を、対象とするよう運動によってB市に認めさせ、それぞれ1992年、1993年に制度化した。現在、同会は、障害者自立支援法に基づく「生活介護」（2箇所）、GH/CH（6軒）、ガイドヘルパーとホームヘルパーの派遣事業所、当事者活動などを運営している。同会のGH・CHには、常勤の支援職員が1か所につき、2人配置されている。居住者は合計26人であり、全員が親元から20歳代前半にGH・CHに転居した。同会の居住者には、「個人将来計画」が本人参画の下で作成される。この計画は、障害者本人を中心とした計画作りであるパーソン・センタード・プランニング（PCP）の一つであり、障害者の希望の実現に向け、環境との相互作用で、障害者を中心に据えた支援ネットワークを創るものである（Mountら=1997）。同会の特徴は、この計画の実践（以下、PCPの実践）、及び当該自治体で制度化される以前から重度知的障害者やその家族のニーズの掘り起こしを行い、GH/CHの設立やガイドヘルパー派遣を開始したことにある。

同会で筆者が行ったアクションリサーチの研究主体であるワーキンググループは、筆者を含めて7名であった。同会のヘルパー派遣センターのコーディネーター2名、作業所・GH/CH職員各1名、自立生活センターの職員1名、障害者本人の母親1名、他組織のGH/CH職員1名である。そのうち、10年以上経験のある職員は、コーディネーター1名、作業所、同会のGH/CH、自立生活センターの職員であった。事例検討会は、同会のGH/CH職員とワーキンググループのメンバーが参加していた。この検討会は、ASを通して職員全体のトレーニングやピアスーパービジョンを重視していた（古井 2007）。そのため、GH/CH居住者は参加していない。約2年のアクションリサーチの期間、ワーキンググループ会議と事例検討会は、基本的に月1回ずつ開催された。

本研究では、アクションリサーチの研究主体であるワーキンググループ会議内での筆者の関わりに焦点を当て、筆者が作成したワーキンググループ会議の議事録を分析対象とするデータとして設定する。このデータは、1回の会議終了後、筆者がパソコンで作成した。その際、会議は実践者同士及び筆者と実践者との相互作用によって成り立つものであるという認識に基づき、議事録といったデータを作成する際は、実践者各々の発言内容のみではなく、筆者の発言内容も意識的に記述した。ゆえに本研究でのデータは、筆者が会議に参加した人々の相互作用場面を事後的に再構築したものと考えられる。このようなデータに対して本研究では、筆者の発言に注目し、その前後の文脈を読みこんだ上で、筆者の発言内容の意味を解釈することによって、会議における筆者と実践者との相互関係から筆者の関わりの内容を明らかにする。具体的には下記3点を行った。

- ①データから、筆者の発言を抽出する。
- ②抽出した発言をカード化し、会議での議論の文脈を踏まえて内容別に分け、カテゴリー名をつける。

③カテゴリー間の関連を考え、筆者のアクションリサーチでの役割に関する概念名を生成する。

以下、カテゴリー名については〔 〕、筆者の役割に関する概念名については【 】で示し、アクションリサーチにおける筆者の関わりを記述する。

Ⅲ. 研究結果及び考察

分析の結果、筆者の側からみたアクションリサーチにおける筆者の役割は、【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】及び【進行管理に側面的に関わること】の2点であった。筆者がこの2点の役割を果たすには、アクションリサーチのみの関わりではなく、筆者による同会での【支援者としての関わり】が重要であった。

1. 「実践知」を「形式知」につなげていくこと

まずアクションリサーチにおける筆者の役割は、〔ASの説明〕〔PCPの実践への質問〕〔PCPに対する評価〕を通し〔冊子化に向けて作成した文章の確認〕を行うことによって、Aの会の【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】であった。

同会のワーキンググループの実践者は、PCPの実践に最重要価値を置いている。そのため、単にASをGH/CHにおける支援に導入すれば良いとは考えていなかった。同会が行ってきたPCPの実践の理念は、「地域であたりまえに暮らす」「(障害者が自分の) 人生の主人公になる」「(障害者) 本人が自らに関することに参画し、自己選択・自己決定する」である。このような理念とその中身は、当事者活動を運営しているといった同会の活動史を踏まえてみたときも、当事者主権(中西ら2003)の内容と共通している。同会の当事者主権を重視する文脈の中、筆者は第1に、学習会に引き続きワーキンググループ会議で新たに導入する支援モデルである〔ASの説明〕を行った。この説明は、ASの計画の書き方といった技術的スキルのみではなく、下記のようにASが開発された社会的背景や理念にも及ぶ内容であった。

ASが開発された背景には、支援組織の状況というのがあります。イギリスでは日本に先行して脱施設化が行なわれています。支援者と居住者とがマンツーマンに近い状況に整えられても、重い障害のある居住者の暮らしは変わらなかった。支援者の数ではない支援の内容を考えるというのがASの背景にあります。(2005年9月)

ASでは、居住者の生活場面(おもに家事や身の回りのこと)への参加日数や回数を記録し評価することが、支援者に対する評価であると位置づけられている。しかし、実践者の中には、支援者に対する評価といえども居住者の行動をも量的に測定するような評価は、居住者の希望を踏まえ単に居住者ができるようになるための評価に陥りかねないと抵抗感を持つ者もいた。AS(Jonesら=2003)は、実践者が一見した限り、職員が居住者の希望も分からないにもかかわらず、職員主導で活動を提案して遂行させ、評価するように捉えられたのである。ゆえに、ASの実践が、当事者主権のための支援を目指す同会のPCPの理念に果たしてつながるのか、という抵抗感を実践者に生じさせた。ただ、このような抵抗感があったからこそ実践者は、ASの形式的な支援スキルを単に利用するのではなく、ASの理念や開発された背景を含む〔ASの説明〕を筆者に求めた。実際に先行研究では、PCPの理念を実現するため組織単位で行う支援方法としてASが位置づけられている。ASに関する先行研究の分析を踏まえた上での筆者の〔ASの説明〕により、ワーキンググループは同会のPCPの実践を補完するために職員の支援力を高めることを目指し、ASを同会のPCPの理念に即し応用して導入することになった。ただ、筆者の〔ASの説明〕のみでは不十分であった。そのため、結果的にはAS(Jonesら=2003)を日本に紹介した研究者のASに関する説明により、実践者は「PCPとASが繋がった」と実感をもてるようになった。

第2に筆者は〔ASの説明〕とともに、下記のように〔PCPの実践に関する質問〕をしていた。

筆者：（PCPの会議の）1回目のときに、（GH/CH居住者）本人の好みや苦手なことなどを確認したのですか？

実践者：過去の話を書くときに、この時代は、どうだったと時系列で聞くことと、一日の生活の流れを聞くこととは別に、本人さんの好み、得意なことを確認しておくのは大事ですね。

ワーキンググループは、PCPの実践にASを応用して導入するのを契機として、同会でのPCPの実践を改めて振り返る必要があると考えていた。PCPの計画はGH/CH居住者本人参画の下で立てられていたが、実行や見直しを行うのが停滞していた。実践者は、PCPの実践を改善した上でのASの導入を望んでいたのである。筆者は、同会のPCPの実践について、GH/CH居住者本人が参画した会議にヘルパーとして参加した経験もあり、その内容とプロセスについて全く知らないわけではなかった。しかしながら、同会がPCPを立てるまでの背景やこれまでの実施状況に関する理解は不足している。ゆえに、ワーキンググループがこれまでのPCPの実践の振り返りをする場面で、筆者自身の理解を深めるとともに、グループがこれまでのPCPの実践を「外部者」である筆者に伝える場面を作ることもつながるように、〔PCPの実践に関する質問〕を行っていた。

この質問とともに第3に筆者は、以下のような〔PCPに対する評価〕をしていた。この評価は、PCPに関する先行研究の整理を踏まえ、下記のようにPCPが重視されるようになった社会的背景や、PCPの特徴に関する説明を含むものであった。

これまで知的障害者は、できないことのみで診断・評価され、社会から隔絶されてきた。知的障害者本人が願いや希望をもっているとは考えられていなかった。否定的な見方を変えるのを前提に、PCPを立てるといふのがあります。（2006年4月）

このような筆者の〔PCPに対する評価〕に対して、PCPについては理解を深めていたワーキンググループの実践者は、欧米でPCPが重視される背景が日本の知的障害者福祉の現状と共通しているといった再確認をしていた。

第4に筆者は、〔冊子化に向けて作成した文章の確認〕をしていた。この確認は、筆者が下書きした文章を実践者の意向に沿う形で作成・修正・加筆するため、下記のように行っていた。

分かりました。はじめから、PCPを補完するために、ASを使うというふうには書き、ASの説明の中にPCPのことを踏まえて書いてみます。（2006年5月）

筆者は、〔ASの説明〕〔PCPの実践に関する質問〕〔PCPに対する評価〕を先述のアクションリサーチのプロセスで繰り返し行うことによって、同会の組織的価値や支援方針を理解することにつとめ、冊子化に向けて文章を作成した。だが、筆者がトレーニングしてきた研究論文の書き方では実践者には伝わりにくいと指摘されることが多かった。そのことを反省し、筆者は実践者に何度も確認を行い書き直した。その成果として、同会のPCPとASの実践に関する冊子が完成するに至った。この冊子の内容は、同会の「実践知」が他者に教授することが可能な程度にまで成文化された「形式知」である。「実践知」は、成文化され他者によって教授された「形式知」と、暗黙的な事例的知識である「暗黙知」との間に、一部成文化可能な教訓的知識として位置づけられる（藤井 2003）。筆者のアクションリサーチの場合、「形式知」とは先行研究としてまとめられているPCPやASである。「暗黙知」とは、Aの会でのこれまでのPCPの実践、及びASの実施に基づいた実践者による支援の経験知である。図1.にあるように、筆者は「形式知」と「暗黙知」との間で「実践知」を創造していくために〔ASの説明〕〔PCPの実践への質問〕〔PCPに対する評価〕〔冊子化に向けて作成した文章の確認〕を行っていた。そのような関わりを継続することによって、冊子の内容となる「形式知」を生み出すことにつながったのである。したがって、筆者はアクションリサーチで、【「実践知」から「形式知」につなげていくこと】を

役割としていたといえる²⁾。

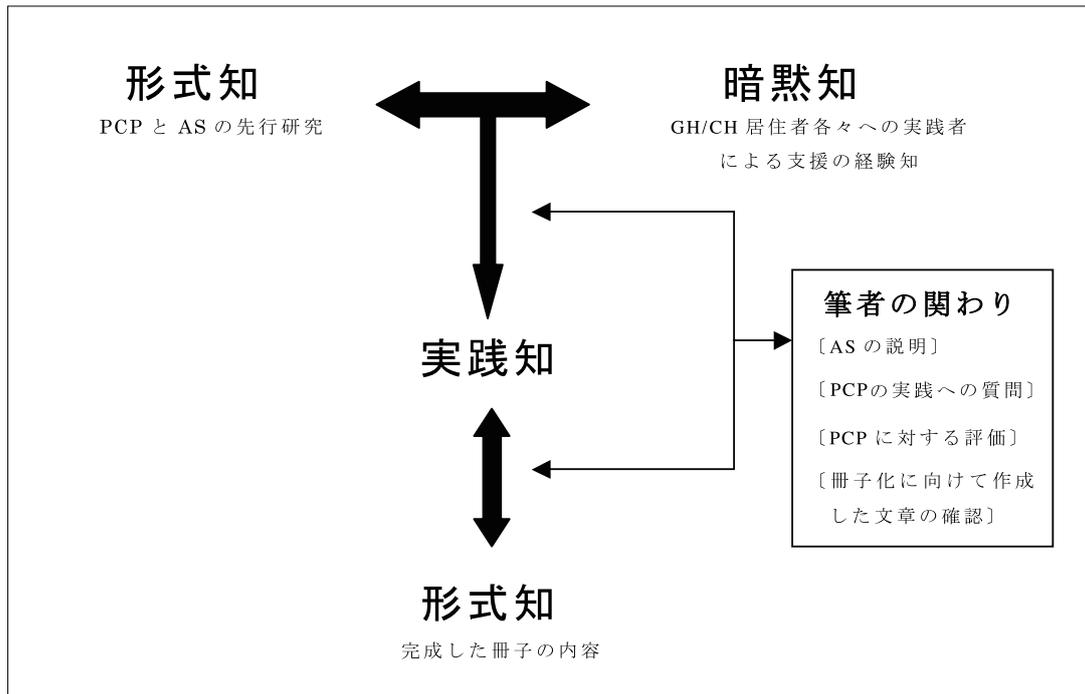


図1 アクションリサーチにおける筆者の役割
【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】

2. 進行管理に側面的に関わること

つぎにアクションリサーチで筆者が担っていた役割は、実践者に対する〔ASの導入へのモニタリング・評価の強調〕〔事例検討会の進行への示唆〕〔話題の転換〕を通して、【進行管理に側面的に関わること】であった。

先述したように実践者の中には、GH/CH居住者の行動をも量的に評価するASの評価方法には抵抗感を感じていた。さらに実践者は、新しい支援モデルを導入する際にかかるGH/CH支援職員の負担を心配していた。同会では、GH/CH職員は居住者の生活介助や金銭管理、保護者や他機関との連絡調整など、ただでさえ仕事量が多いと考えられている。そのような中で筆者は下記のような〔ASの導入へのモニタリング・評価の強調〕を行った。

a さんの事例検討会からだいぶたっているから次の検討会のときにでも（実施状況を）発表してもらえば。（2005年7月）

実践者は、居住者の生活を乱さず職員主導にならないように、PCPやASの理念について深く検討することを大切にしていた。同時に、実践者自らやGH/CH職員の抵抗感や負担が過重にならず納得する形でASを慎重に実行しようとしていた。実際、ワーキンググループ会議や事例検討会では、PCPやASを実施する意義を議論するのに多くの時間を費やしていた。その際筆者は、モニタリングや評価を行うことを強調した。なぜなら筆者は、先述の【「実践知」から「形式知」につなげていくこと】を目指すには、PCPやASを通してAの会の組織的価値や支援方針を明確にするとともに、それらを同会の実践に裏打ちされたものとして示したかったからである。実際、モニタリングや評価の場面で実践者やGH/CH職員は、PCPやASの実施を一つのきっかけとした自らや居住者の変化を質的に評価していた。

また、筆者は〔事例検討会の進行への示唆〕を下記のように行っていた。

事例検討会で議題にすることは、もう一人の支援職員と検討会前に共有しておく必要がある。（2005年4月）

同会のGH/CHは1軒につき常勤の支援職員が2名配置されている。勤務時間の関係で、2名の職員が同じ時間帯にGH/CHで支援に当たることは少ない。ワーキンググループが考案したASを応用した支援の実施は、GH/CH職員が担っている。ゆえに筆者は、GH/CH職員2名が共通理解を持たない限り、支援の継続が困難となりモニタリングや評価にまで結びつかないと考えたため、上記のような示唆を行っていた。

さらに筆者は、下記のような発言をしていた。

（冊子の大きさ等）デザインの話は今後に話し合うということにしておきませんか？（2006年4月）

このような〔話題の転換〕に関して筆者は、実践者の話が議題の本筋とは異なっていると感じた際に、議論が円滑に進むように行っていた。

ワーキンググループ会議や事例検討会の日程や内容といった進行管理の全般は、グループの実践者が同会のGH/CH居住者や職員の状況を考えた上で自主的に行っていた。ただ、「（筆者が）来るから準備しておかないといけない」という実践者の声があった。このことからして筆者は、実践者のみでは互いの抵抗感や負担といった事情を考慮するために曖昧になりがちな〔ASの導入へのモニタリング・評価の強調〕〔事例検討会の進行への示唆〕〔話題の転換〕の関わりをすることによって、進行管理を側面的に支えていたのである。したがって、筆者は【進行管理に側面的に関わること】をアクションリサーチにおける役割としていたといえよう。なお、〔ASの導入へのモニタリング・評価の強調〕〔事例検討会の進行への示唆〕は、【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】につながっている。ゆえに、本研究の分析から明らかになった2点の役割は、相互に関連したアクションリサーチにおける筆者の役割であった。

3. 支援者としての関わり

さいごに、上記2点の役割を筆者が担うことができたのは、アクションリサーチでの関わりのみではなく、筆者にAの会での【支援者としての関わり】があったためである。例えば筆者は、下記のようにワーキンググループ会議で事例検討会の内容について考察している場面で、〔GH/CH支援職員に対する疑問・確認〕をしていた。

aさんのところで気になったのは、スケジュール確認をどこでやっているのかが計画にない。リビングだと成立しないと思うが…。（2005年6月）

これは、GH/CH支援職員がASを通して居住者aさんに「毎日のスケジュール帳の確認」をする活動計画の内容の議論で筆者が述べた発言である。この発言で筆者は、計画様式に活動を実施する場所の記述欄を作ることを実践者に求めていた。筆者は、aさんが生活しているGH/CHでは、他の居住者がいるリビングで職員とaさんが集中してスケジュール確認をするのが可能であるか疑問に思った。このような疑問は、GH/CH居住者が生活している空間を筆者が知っているからこそ生じてくるものである。筆者は、同会のヘルパーとしてGH/CH居住者の支援に当たっていた【支援者としての関わり】から、実践者が理解できる居住者の事例を挙げて疑問を投げかけ、実践者の考えを確認することにつながった。さらに筆者に【支援者としての関わり】があることによって、実践者には時間的制約がある中、自らの実践の内実、居住者の言葉のみによらない表現について逐一説明するのを省けた。

IV. 総合的考察

上記の結果を基に、以下では研究者が支援現場の実践者との協働で行うアクションリサーチの方法論的考察を行う。

1. アクションエンゲージメントを基盤とした「研究者という立場から関わる実践者」のスタンス

まず筆者は、Aの会でのアクションリサーチにおいて、〔ASの説明〕等を行うと同時に、【支援者としての関わり】を通して同会の実践を現実的・合理的に学んできた。それらを活かして、実践者と信頼関係を築いた上でアクションリサーチのプロセスに携わり、同会の【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】ができた。したがって筆者によるアクションリサーチでは、筆者の【支援者としての関わり】であるアクションエンゲージメントが効果的に機能したと考えられる。アクションエンゲージメントとはRolfesenら(2007)によると、外部者(outsider)である研究者が、予め現場で内部者(insider)として一定期間働くことである。それによって研究者は、①ローカルな知を学ぶことができ、②内部者の置かれている状況に対して感情的理解を高めて信用を得、③内部者と共有できる感覚を双方が持ち合わせ信頼関係を築くことによって、アクションリサーチの質を高めることに貢献すると論じられている。

筆者の場合、このアクションエンゲージメントが、支援現場の実践者と協働で利用者の生活改善を目的とするアクションリサーチを行う上での基盤となった。アクションリサーチにおいて研究者は、アクションとしての成功とリサーチとしての成功との双方を期待している。しかしながら本研究のように、実践者主導の取り組みを自覚的にアクションリサーチとして行う場合、研究者にとっても実践者によるアクションがリサーチよりも優先されよう。実践者は、アクションの成功を目指すために、リサーチの知見をもつ研究者に参加を依頼する。研究者はその期待に応えるため、【支援者としての関わり】に限らず何らかのアクションエンゲージメントによって、実践者や利用者の置かれている状況を感情的に理解し、実践者と共有できる感覚を持ち合わせることが必要となる。それにより人びとの言動や感情に加え、空間やモノの意味に注意して利用者への支援を改善していくアクションリサーチに臨むことにつながる。ゆえに、支援現場の実践者とのアクションリサーチでは、アクションエンゲージメントを基盤とすることが重要である。さらに、本研究の結果を通して、アクションリサーチにおいてアクションエンゲージメントを基盤とした筆者は、「研究者という立場から関わる実践者」のスタンスをとっていたと考える。あらかじめ、研究者と実践者という立場を二分し、実践者が目指す「目標状態実現に向けた長期的な時間プロセスのなかで研究者／対象者構造を転換」するのではなからう。アクションの成功を第一に目指す場合、研究者であっても、今・ここで利用者の状況を改善したいと願う実践者の一員として見なされてよいはずである。アクションエンゲージメントによって、実践者や利用者とは共有できる感覚を持てる場合は尚更であろう。ただ、ここでの「実践者」は、アクションリサーチの場の内部と外部とを行き来する「実践者」という意味をもつ。「研究者という立場から関わる実践者」のスタンスをとるアクションリサーチの研究者は、内部の実践者にとって必要な【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】とともに、リサーチの分析を通して得た知見を、内部の実践者や他の同様の支援現場に伝える当該領域での「実践者」である。

2. モニタリング・評価へのセンスメイキング

つぎに、アクションリサーチにおいて筆者は、【進行管理に側面的に関わること】の役割の中で、〔ASの導入へのモニタリング・評価の強調〕を重視して行っていた。実際にアクションリサーチの結果、同会による支援の評価期間がこれまでより短縮され、支援によるGH/CH居住者・支援職員・周囲の変化がより明らかにされるようになってきた。したがって筆者によるモニタリング・評価に関するセンスメイキングが、実践者のそれらに対するセンスメイキングを促し、デシジョンメイキングにまで至る一助になったと考えられる。センスメイキングとは、実践者が過去に得た情報、知識、主義、価値観に基づいて、実践者がデシジョンメイキングを意味づけていくことであり、デシジョンメイキングとは実践の渦中において実践者が下す決定や判断のこと

である（矢守 2006）．田垣（2007）によると、障害者施策推進の住民会議における研究者の役割として、メンバーによるセンスメイキングを促すために、研究者自身がセンスメイキングをすることが重要であると論じられている．アクションリサーチにおいて筆者は、Aの会の実践者にモニタリング・評価のセンスメイキングを促すために、自らがそれに対するセンスメイキングを行おうとしていた．

知的障害者ケアマネジメントにおいて、プランの作成はなされるものの、それをアクションに移し、モニタリング・評価することが不十分であると論じられている（Cambridge, P. et al. 2005）．モニタリング・評価は、支援の成果を利用者や実践者内で分かち合いその後の実践に活かしていく点、さらに第3者にも説明していく点で十分に行うのが望ましい．Aの会においても、アセスメントとプランに対しては、支援職員一人の一方的な見方で構成されないように、複数の支援職員による評価が大切にされていた（古井 2007）．それに比べて、支援実施に伴うモニタリング・評価の議論に関しては行われてはいたものの曖昧であると筆者は感じた．重度知的障害者への支援は、障害者の側からの言葉による評価を得るのが困難な場合が多く、彼／彼女らのノンバーバルな表情や行動によって支援のモニタリングや評価を行っていくには長期間必要である．そのことに加え、筆者によるアクションリサーチの場合、新しいモデルの導入に対して支援者の抵抗感や負担感がある状況で、支援のモニタリング・評価をするためには、支援者側がある程度納得して支援を実施し継続しているかに依存していた．本研究でアクションリサーチの場となったAの会だけではなく、当事者主権を目指すような支援現場の実践者は、モニタリング・評価において利用者の行動を単に量的に測定することに対して抵抗感をもつのではなかろうか．それは、自らによる介入・モニタリング・評価が利用者への単なる能力評価につながると実践者によって考えられているためである．また、支援現場の実践者が量的評価に対して抵抗感をもつのは、安易に行動変容の測定ができにくいくらい複雑な状況、多忙の中で利用者の日常を支えているという自負が実践者にあるからかもしれない．ゆえに、支援現場の実践者と協働で利用者の生活改善を目的とするアクションリサーチの場合、実践者に支援のモニタリング・評価のセンスメイキングを促す必要が生じる．そのために「研究者という立場から関わる実践者」のスタンスをとる研究者は、アクションエンゲージメントを行い実践者が考える利用者の生活改善のモニタリング・評価の視点を知った上でそれらに対するセンスメイキングを行うことが重要である．

3. セミフォーマルな場を作ること

さいごに、アクションエンゲージメントを基盤とした「研究者という立場から関わる実践者」のスタンスをとる研究者が、実践者による利用者の生活改善の取り組みに関わることによって、その場はセミフォーマルな場となる．これは実践者主導の取り組みであっても「（筆者が）来るから準備しておかないといけない」というAの会の実践者の発言や、筆者が【進行管理に側面的に関わること】を役割としていたことから分かるであろう．研究者がセミフォーマルな場を作ることがアクションリサーチにつながる．実践者のみでの取り組みでは、先述したように実践者どうしの負担感などの感情に進行が左右されがちになる．また、【「実践知」を「形式知」につなげていくこと】を目指す場合、利用者の生活支援を本務としている実践者には時間の制約がある．支援現場について全く分からない者が参入すると、逐一自らの実践を形式的に説明せざるをえなくなるため場がフォーマルになり、実践者が抵抗感等の感情を表せないということもある．これらのことから研究者がアクションエンゲージメントを行い、実践者にとってセミフォーマルな場でアクションリサーチを展開していくことがアクションとしての成果とリサーチとしての成果の双方を生み出すと考える．

以上、Aの会での重度知的障害者の地域生活を支援するためのアクションリサーチにおける筆者の役割について提示し、方法論的考察を行った．しかしながら本研究では、それらに対して同会の実践者に考えを聞いた

上での考察は行っていない。同会でのアクションリサーチはすでに終了し、実践者は次の実践課題に取り組んでいる。また、筆者が記述したデータから自分の役割について、筆者自身が分析することにも限界はある。さらに、筆者が大学院生の立場でアクションリサーチを行ったことも研究結果や【セミフォーマルな場を作ること】といった考察に影響を及ぼしていると考えられよう。

今後は、他の支援現場においてもアクションリサーチを実施し、本研究の結果を検証していくことを課題としたい。

註

- 1) 谷中輝雄が提唱する生活支援(谷中 1996)の実践方法の一つである「ステップ方式をとらない」というのは、「階段を上らせるように社会復帰を進めるのではなく、本人の望む生活をしてみて問題がある部分を支援していくのである。問題から取り組むのではなく、本人の夢から現実の問題を共に考え、支援に取り組む」ことである。さらに、選択肢形サイクル (Bradshaw 2005) とは、支援者が、生活場面で様々な活動をする機会を障害者に提供し、障害者が経験をすることにとどまらず、その経験を両者が振り返り、障害者が選択肢を形成していく過程である。
- 2) 「実践知」及び「形式知」には、以下の2点があると考えられる。①実践者と研究者のブレインストーミングを基に実践者が日常的に使用している言葉で表現されるものと、②研究者がアクションリサーチの過程でのデータ分析によって浮かび上がるものである。本研究では①の意味で「実践知」及び「形式知」という用語を使用している。

文献

- Bradshaw, J. (2005) "The Role of Communication in Person Centred Planning: Working with Complex Needs", Cambridge, P. and Carnaby, S. ed. *Person Centred Planning and Care Management with People with Learning Disabilities*, Jessica Kingsley Publishers, 118-33.
- Cambridge, P. and Carnaby, S. ed. *Person Centred Planning and Care Management with People with Learning Disabilities*, Jessica Kingsley Publishers.
- 藤井達也 (2003) 「ソーシャルワーク実践と知識創造」『社会問題研究』52(2), 101-22.
- 藤井達也 (2006) 「参加型アクションリサーチ——ソーシャルワーク実践と知識創造のために」『社会問題研究』55(2), 45-64.
- 古井克憲 (2006) 「知的障害者地域生活支援スタッフの学習会——実践現場へのアクティブサポートモデル導入に関する初期過程」『社会問題研究』55(2), 123-48.
- 古井克憲 (2007) 「重度知的障害者の居住支援——パーソン・センタード・プランニングにアクティブサポートモデルを導入したグループホームにおける支援」『社会福祉学』48(2), 92-105.
- 古井克憲 (2008) 「重度知的障害者の地域生活を支援するためのアクションリサーチ——『参加』を促進する組織的戦略」大阪府立大学大学院社会福祉学研究所2007年度博士学位論文.
- 古井克憲 (2009a) 「重度知的障害者が求める地域生活支援の視点とは——パーソン・センタード・プランニングにおけるアセスメントの質的分析から」49(4), 65-78.
- 古井克憲 (2009b) 「重度知的障害者が求める地域生活支援における障害者と支援者との関係性とは——パーソン・センタード・プランニングにアクティブサポートモデルを導入した支援の成果と実施過程に関する質的分析から」『社会福祉学』50(1),

- Jones, E., Perry, J., Lowe, K. et al. (1996) *Active Support—A Handbook for Planning Daily Activities and Support Arrangements for People with Learning Disabilities*. (=2003, 中野敏子監訳・編『参加から始める知的障害のある人の暮らし——支援を高めるアクティブサポート』相川書房.)
- McNiff, J. and Whitehead, J. (2006) *ALL YOU NEED TO KNOW ABOUT Action Research*, SAGE Publications.
- Mount, B. and Zernik, K. (1988) *IT'S NEVER TOO EARLY IT'S NEVER TOO LATE: A Booklet about Personal Futures Planning*, Metropolitan Council. (=1997, 橋本義郎監訳『さあ、はじめよう知的障害者のためのネットワークづくり——「個人将来計画法」への招待』明石書店.)
- 中西正司・上野千鶴子 (2003) 『当事者主権』岩波新書.
- Rolfen, M., Johnsen, A. and Knutstad, G. (2007) “Action Engagement: Improving Researchers’ Involvement in Action Research Projects” *Syst Pract Act Res*, 20, 53-63.
- 杉万俊夫 (2006) 「質的方法の先鋭化とアクションリサーチ」『心理学評論』49(3), 551-61.
- 田垣正晋 (2007) 「障害者施策推進の住民会議のあり方とアクションリサーチにおける研究者の関わり方に関する方法論的考察」『実践社会心理学研究』46(2), 173-184.
- 矢守克也 (2006) 「語りとアクションリサーチ——防災ゲームをめぐる」『心理学評論』49(3), 514-25.
- 矢守克也 (2007) 「アクションリサーチ」やまだようこ編『質的心理学の方法——語りをきく』新曜社, 178-89.
- 谷中輝雄 (1996) 『生活支援——精神障害者生活支援の理念と方法』やどかり出版.

The role of an action researcher who collaborates with people engaged in providing community support for people with severe intellectual disabilities

Katsunori Furui

Wakayama University Faculty of Education

Abstract

This study aims to discuss the role of the researcher in activities such as my action research in support of people with severe intellectual disabilities. Further, this study aims to examine the researcher's methodology and involvement in action research that is being conducted to support disabled people in community homes.

A qualitative analysis of field notes revealed the following. The role that I conducted as action researcher involved three kinds of responsibilities: converting practical knowledge into representative knowledge, involvement as a part of progress management, and involvement as a part-time support.

It can be concluded that the important role of an action researcher who collaborates with people engaged in providing community support involves an element of "action engagement", it also requires the researcher to make sense of monitoring and evaluation conducted by support staff in the support process and to make the semiformal atmosphere.

Key words: action research, people with severe intellectual disabilities, practical knowledge,
action engagement, sense making